

坂上郎女の悲哀

坂上郎女の悲哀

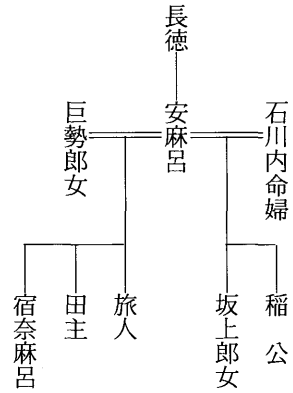
— 女として母として —

北 島 徹

一

坂上郎女は『万葉集』に長歌六首、短歌七十七首、旋頭歌一首という、女性としては集中最多の歌を残す、万葉女流歌人の第一人者ともいうべき人物である。しかし、郎女のこととは『万葉集』以外の文献には何も記されておらず、彼女のことを知るためには『万葉集』に頼るほかはない。

まず『万葉集』巻四・五二八の左注「右、郎女は佐保大納言卿の女なり」によって、郎女の父が佐保大納言と呼ばれた、大伴宿祢安麻呂であることがわかる。母は巻四・六六七の左注に「右、大伴坂上郎女の母石川内命婦」とあり、石川内命婦（諱は巻二〇・四四三九題詞注に邑婆とある）と知られる。安麻呂には別に旅人・田主・宿奈麻呂の子があり、郎女は旅人の異母妹となる（次頁系図参照）。



ところで、先にあげた五二八番の左注は、続けて次のようなことを示している。

はじめ一品穂積皇子に嫁ぎ、寵をかがふること類なし。しかして皇子薨ぜし後時に、藤原麻呂大夫、郎女を娯ふ。

これを素直に読めば、郎女は最初穂積皇子に嫁し、皇子が亡くなった後、藤原麻呂の求婚を受けたことになる。さらに巻四・七五九左注、また四〇七、四〇八題詞によって、大伴宿奈麻呂と結婚して大嬢と二嬢とを生んでいることがわかる。

この坂上郎女に関しては、以前川田順氏によって「要するに穂積皇子に娶られた時代だけが純真の女性であつて、皇子薨後の彼女の生活は、万葉女流中随一の放縦多淫者、平安朝和泉式部一味の紅袴者流といへども既で逃げ出さねばなるまい」と酷評を受けたことがある（「大伴家持」『万葉集大成』一〇、昭二九・五・三一）。しかし最近では、彼女の実生活と歌とを直接結びつけるのではなく、歌を一つの文学作品としてながめ、必ずしも歌に現れたそのままの人生を歩んだのではないと考えるようになっていく。

しかし、だからといって郎女の歌が、すべて実生活とは無縁の産物であるとはいえない。以下、郎女の結婚と再婚、また恋愛について万葉の歌をもとに順次ながめてゆき、彼女の心の遍歴を覗いてゆくことにしたい。

一一

郎女が最初に嫁いだ穂積皇子は、『日本書紀』天武二年二月の記事、『続日本紀』靈龜元年七月の記事によると、天武天皇の第五皇子となっているが、実際には第八皇子であったようである。この天武天皇の皇子に、なぜ郎女が嫁ぐようになったのかは、何の記録もなく不明としかいいようがないが、あるいは久米常民氏が言われるように、父安麻呂が「自己の政治生命力強化」（『大伴坂上郎女』『和歌文学講座』万葉の歌人）桜楓社、昭四四・五・一）のために嫁がせたとみることもできよう。穂積皇子がそれを承諾した背後には、神堀忍氏の言われるように、穂積の母石川朝臣太蕤娘と、郎女の母である内命婦石川朝臣とが近い関係にあり、皇子の母太蕤娘を通じての迫りがあったことも考えられる。

ともあれ郎女は、十五歳ぐらいで穂積皇子のもとに嫁いだものと思われる。それがいつ頃のことであったのかは記録もなく不明であるが、相手の皇子の薨去が、靈龜元年（七一五）のことなので、それ以前であることだけはたしかである。

穂積皇子には、それ以前に深く愛した女性がいた。結局は結ばれることなく、皇子よりも先に世を去ってしまった人物、但馬皇女である。この但馬皇女と穂積皇子との関係については、以前にも少し述べたことがあるが（『春日山黄葉にけらし我が心痛し——穂積皇子の恋情——』『古典と民俗』第十五号、昭五八・一）、今坂上郎女

のことを論じる上で、どうしても触れておく必要があるので、少し述べておくことにする。

但馬皇女は、穗積皇子と同じく天武天皇の子である。母は水上娘で、穗積皇子とは異母兄妹の間柄となる。いつ生まれたのかははっきりしないが、一般には天武四年（六七五）から数年の間に生まれたといわれている（『万葉集歌人辞典』雄山閣、昭五七・三・二〇、大久間喜一郎説）。ここでは仮に天武四年と考えておくことにする。

一方穗積皇子はというと、天智七年（六六八）に誕生したとみられている（黒沢幸三「穗積皇子と但馬皇女」『文学』昭五三・九）。とすると穗積皇子は但馬皇女より七歳ほど年長であったことになる。

この二人がいつ頃から愛し合うようになったかはわからないが、仮に早くから思いを交わしていたとすると、結婚できたのは、早くても皇女が十三歳になる年ということになる（「戸令」に「男の年十五、女の年十三以上にして婚嫁聴せ」とある）。つまり持統元年（六八七）である。しかしこの時二人は結婚することが許されなかった。というのも父天武天皇がこの前年に亡くなり、その殯宮がまだ営まれていたからである。服喪期間は令の規定によれば、父親の亡くなった場合一年となっているが、天武天皇の殯宮は二年あまりも営まれているので、その間は結婚できなかっただろう。殯が終わり、天武天皇が大内陵に葬られたのは持統二年（六八八）十一月のことであった。

明けて持統三年には、四月に天武と持統の子、皇太子草壁皇子が薨じている。二人にとっては兄にもあたるわけで、またしても喪に服することになったと思われる。二人が結ばれるのは、翌年を待たねばならなかったのではないだろうか。

ところが結婚できるはずの持統四年、但馬皇女はどうやら天武天皇の長男高市皇子のもとに嫁ぐことになったようである。高市皇子はこの年太政大臣となっているが、それにあわせて但馬を妻の一人に加えたのではな

いだろうか。その時の気持ちを、但馬は次の三首の歌に託して歌いあげている。

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思いひて作らす歌一首

秋の田の穂向きの寄れる片寄りに君に寄りな言痛くありとも

(二・一一四)

穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はす時に、但馬皇女の作らす歌一首

後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の隅廻に標結へ我が背

(二・一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、竊かに穂積皇子に接ひ、事既に形はれて作らす歌一首

人言を繁み言痛み己が世にいまだ渡らぬ朝川渡る

(二・一一六)

高市皇子に嫁ぎながら一途に穂積皇子を思い続けている皇女の心を、これから読み取ることができる。穂積皇子の方も、苦悶の日々を過ごしたことだろう。巻十六にこんな歌がある。

穂積皇子の御歌一首

家にある櫃に鏤刺し蔵めてし恋の奴のつかみかかりて

(十六・三八一六)

家の櫃に鍵をかけてしまひ込むようにしてあきらめたはずなのに、この恋の奴めがしつこくつかみかかってきて、と半ば自嘲的にあきらめ切れぬ思いを歌ったこの歌は、但馬が高市皇子のもとに行ったこの頃の作とみると、穂積の心痛のほどがよくわかる。

時は流れ、持統十年（六九六）、二人の間に立ちふさがっていた高市皇子が薨去した。これによって晴れて二人は結ばれることになるわけだが、それもそう簡単にはゆかなかった。但馬が夫の喪に服さなければならなかったからである。

夫が亡くなった場合、令の規定では一年の喪に服さなければならぬことになっている。しかし、高市皇子のような高い身分・地位にあるようなものの場合、その妻はまる六年、すなわち七回忌が済むまでの間喪に服

さなければならなかったようである（皇族等の高貴な人物の未亡人が再婚をする場合、七回忌が済むのを待つ必要があったことについては、神堀忍「大伴家持と坂上大嬢―その年齢推定の試み―」『万葉集研究』第二集、塙書房、昭四八・四・三〇、に述べられている）。

高市の薨去後七年目に結婚できたとすると、穗積皇子は三十六歳、但馬皇女は二十九歳になる。もう決して若くはない年齢である。しかし、ともあれ大宝三年（七〇三）、別々の道を歩いてきた二人がやっと出会い、結ばれる年がやって来た。この時を二人はどんなに待ち焦がれていたことだろうか。ところが、この時二人を待ち受けていたものは、但馬の病という、予想外の出来事であった。

昭和四一年から四三年にかけて藤原宮跡の発掘調査が行われたが、その時、但馬皇女の屋敷から典藥寮に大量の薬を注文したことを記した木簡が出土した。『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第二五冊によると、この木簡は大宝三年頃のものだという。二人が晴れて夫婦となれるはずのこの年、但馬は重い病気に倒れていたのである。

これがもとであったか、和銅元年（七〇八）六月二十五日、去りゆく夏と共に皇女はこの世を去ってゆくのである。残された穗積皇子の悲しみはいかばかりであったろうか。但馬が薨去した年の冬のことと思われる、穗積皇子は次のような歌を詠んだ。

但馬皇女の薨じて後に、穗積皇子、冬の日の雪の降るに、御墓を遥かに望み、悲傷流涕して作らず歌一首

降る雪はあはにな降りそ吉隠よなばりの猪養みかひの岡の寒からまくに

（二・一・二〇三）

皇子がこの歌を口ずさんだのは、藤原宮であったか、それともう少し吉隠に近いところであったかはわからない。いずれにせよ皇子は、降りしきる雪の中に立って、皇女の眠る遥かなたの吉隠の猪養の岡の方を眺

めながら、皇女に寒い思いをさせないでくれと雪に訴えかけている。死別して後、秋を経てもなお穂積は但馬のことを思い続けていたのである。

この穂積皇子の嘆きは、「降る雪は」の歌を詠むことでおさまるようなものではなかったようである。巻八にこんな歌がある。

今朝の朝明雁^{あさけかり}が音聞きつ春日山もみちにけらし我が心痛し

(八・一五二三)

この歌には、春日山が詠み込まれている。集中「春日」の歌われたものは、平城遷都(和銅三年三月)後の作と考えてよいので、これも和銅三年秋以後の作と見てよいだろう(この歌について坂本信幸氏は、当時皇子は知太政官事になっていたので、和銅元年から平城遷都のあった三年までの間に、新都造宮にかかわることによって平城を訪れ、そこで詠んだものであらうと考えておられる。「穂積皇子の御歌、巻八・一五二三をめぐって」『叙説』第十二号、昭六一・三)。ここで「我が心痛し」と歌っているのは、但馬皇女とともに春日山の紅葉を見ることができぬ悲しみを表していると思われるので(前掲拙稿参照)、皇子の嘆きは皇女の薨去後も、ずっと続いていたと考えられるのである。

そんな穂積皇子のもとに嫁ぐことになったのが郎女である。この結婚には父安麻呂のすすめが強く働いていたと思われるので、安麻呂の亡くなる和銅七年以前には結婚したことだろう。それは平城遷都後間もない頃のことではなかっただろうか。

というのは、先にあげた穂積皇子の一五一三番の歌に続いて載せられている皇子の歌が、坂上郎女との縁談を匂わせているように読めることによる。

秋萩は咲きぬべからし我がやどの浅茅^{あさち}が花の散りぬる見れば

(八・一五一四)

この歌について黒沢幸三氏は、浅茅が但馬皇女を、萩が坂上郎女を表していると説かれた(前掲論文)。つまり、

この歌は一五三番の歌と時を同じくする作で、和銅三年の夏の終わりにちがやの花の散るように死んでいった皇女を思いだすとともに、縁談のもち上がっている坂上郎女が間もなく興入れしてくることを思いながら詠んだものとも言われるのである。後でまたこの歌については触れることになるが、この黒沢氏の説はその通りだと思う。そこで穂積皇子と坂上郎女との結婚を、但馬の薨去後しばらくしてから、和銅三年頃と考えるのである。

和銅三年に結婚したとすると、二人の結婚生活は、皇子の薨去する霊龜元年（七一五）七月二十七日までの四年ほどであったことになる。その間皇子が郎女を寵愛したことは、先の五二八番の左注に記すところである。しかし、それが郎女にとって幸せなものであったかどうかは別問題である。皇子が但馬のことを思い続けていたのだとすると、郎女にとっては、ただ一人の人として愛されることがなかったわけであり、ある意味では満たされぬ思いを抱き続けることにもなっただろう。穂積皇子が郎女を大切にし、かわいがったというのも、一面真実であろうが、年齢も親子ほど離れていた（和銅三年当時、皇子は四十歳を超えていたと思われる）わけなので、その愛し方は、夫の妻に対するようなものでもなかったとみることもできるのである。

こうして郎女の最初の結婚は、女として愛されるという幸せに満ちたものとは程遠いものであったことが想像されるのである。

三

穂積皇子の薨じた後、坂上郎女は寡婦として皇子の喪が明けるまでの間、一人寂しく暮らさねばならなかつ

た。その期間は前述したように、やはり七回忌が済むまでの丸六年間であつたようである（神堀忍氏前掲論文）。坂上郎女にとっての次の男性との出会い、その喪が明ける頃にやって来た。その男性は藤原不比等の第四子、麻呂である。

穂積皇子の七回忌は、養老五年七月になる。これが済むと、郎女は再婚できることになるが、その頃に麻呂と交わしたと思われる歌が、巻四に並んでいる。

京職藤原大夫、大伴郎女に贈る歌三首 卿諱を麻呂といふ

娘子らが玉くしげなる玉櫛くしの神さびけむも妹に逢はずあれば (四・五二二)

よく渡る人は年にもありといふを何時いつの間にそも我が恋ひにける (四・五二三)

蒸し衾ふすまなごやが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも (四・五二四)

大伴郎女の和ふる歌四首

佐保川の小石踏み渡りぬばたまの黒馬の来夜くよは年にもあらぬか (四・五二五)

千鳥鳴く佐保の川瀬のさざれ波止む時もなし我が恋こふらくは (四・五二六)

来むと言ふも来ぬ時あるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを (四・五二七)

千鳥鳴く佐保の川門の瀬を広み打橋渡す汝なが来と思へば (四・五二八)

五二二の題詞に「京職藤原大夫」とあることによって、これらの歌は、麻呂が左京大夫となつた養老五年六月以後に詠まれたものと考えられる（はやく契沖が『万葉代匠記』において「養老五年以後神龜五年以上」と指摘している）。したがって、坂上郎女が皇子の七回忌を済ませる頃と、時期的には一致することになる。五二八番の左注に「藤原麻呂大夫、郎女を娉めとふ」とあるのは、まさにこの頃のことであつたとみてよいだろう。

さてその麻呂と郎女との贈答歌であるが、既に指摘されているように、二人の歌とも、既存の歌の模倣、あ

るいは改作であると思われるものばかりである。それは特に坂上郎女の歌において顕著であり、久米常民氏はこれを『新古今集』にみられるような「本歌取り」的な高度な文学的な意図と手法」とみて、いわば一つのあそびであり、それがまたみやびでもあると述べておられる。

こういった特徴をもつこれら贈答歌によって、二人の間にはさほど熱烈に求め合うといった愛情はなかったとみることも可能である。しかし、坂上郎女が「虚構文化圏の主人公」であると認めた上で、なおこれらの贈答歌について次のように述べられた伊藤博氏の説を参考にと、やはり二人は愛情を交わす関係にあったと考えることもできる。

郎女その和歌は、一方、「止む時もなし我が恋ふらくは」(五二六)「打橋渡す汝が来と思へば」(五二八)

などとも歌ってまじめなところもある。——中略——加えて、親和関係の確立しているところの恋する男

女のあいだでは、否定的に掛け合うのが贈答のエチケツトでさえあるといった習慣が遠い民謡の時代から

あった——以下略——(「天平の女歌人——坂上郎女の位置」『上代の文学と言語』昭四九・一一・一二)

養老五年当時、麻呂は二十七歳、坂上郎女は、穂積皇子に嫁した時に仮に十五歳であったとすると二十六歳となり、二人はほぼ同年であったと思われる。郎女にとっては初めて一人の女として愛してもらえ人物に出会ったことになる。それだけに期待も大きかったことだろう。ただし不安もあったと思われる。それは、麻呂はすでに別の女性と結婚していて、養老四年に娘「百能」までが生まれていたからである。初めから、たった一人の女として愛されるという立場にはなかったのである。

この不安は、別の形で破局を迎えるということになった。それは麻呂が突然八上采女に心奪われ、郎女に対する思いを失うというものであった。

麻呂には、養老八年、改元して神亀元年(七二四)に浜成が誕生している。その母親が八上采女であった。

ということとは、麻呂と八上采女との関係は養老六、七年頃に始まってはいくつてはならない。郎女と麻呂との恋愛は、ほんの短い間に終わってしまったとみてよいだろう。

そのことは、郎女と大伴宿祢宿奈麻呂との結婚の時期をみていえることである。坂上郎女は麻呂と別れた後、異母兄宿奈麻呂と結ばれ、大嬢と二嬢の二人の娘を産んでいる。その大嬢の誕生は、養老六、七年とみられている（神堀氏前掲論文）。つまり養老五年に前夫の喪が明ける頃麻呂から求婚されたものの、その恋はわずかの間しか続かず、結局郎女はすぐに異母兄と結婚することになった。麻呂の方も八上采女と出会って、同じ頃に結婚したのだろう。それぞれの子供がほぼ同じ頃に誕生しているところを見ると、どうもそう考えるしかないだろう。

ところで宿奈麻呂との結婚であるが、これもとうてい幸せそのものであったとはいえないもののようであった。宿奈麻呂はすでに四十歳代であったと思われる、郎女とはかなり年齢が離れていた。また宿奈麻呂は養老三年に備後守正五位下で、安芸・周防の按察使を兼ねたと『続日本紀』に記されているので、任地に出掛けていた。そんな宿奈麻呂と結婚したというのだから、二人が相会うのは年に一度だけのものではあっただろう。

宿奈麻呂が地方官の任を終えて帰京したのは、養老八年（神亀元年）のことであった。しかし二人の夫婦生活は長続きしなかったようである。神亀二年頃には二嬢が生まれたと思われるが、その後間もなく宿奈麻呂はこの世を去ったのではないかとみられている（『続日本紀』に神亀元年の記事以後その名が見られないことによる）。ただ、たとえ短くとも幸せな結婚生活が送れたのであればよいのであるが、二人の間に交わされた相聞歌が一首も残っていないところを見ると、どうも二人の仲は冷めきったものであったのではないだろうか。

宿奈麻呂の残した歌は次の二首だけである。

大伴宿奈麻呂宿祢の歌二首

うちひさす宮に行く児をまかなしみ留^とむれば苦しやればすべなし

(四・五三二)

難波瀉潮千のなごり飽くまでに人の見む児を我しともしも

(四・五三三)

これらの歌は、先にあげた麻呂と郎女との贈答歌の少し後に配列されているので、養老五、六年頃の作であろう。宿奈麻呂が郎女を妻としていた頃と思われるが、任地にあって采女などを中央に送りだす時の寂しさが歌われている。宿奈麻呂の心は郎女に向かっていたのではなかったのである。

四

以上ながめてくると、坂上郎女の恋愛と結婚とは、とうてい幸せに満ちたものとはいえない。郎女は、まさに「愛情生活の敗者」(久米常民氏前掲論文)であったといえるだろう。清少納言『枕草子』の中に次のようなことが記されている。

世の中になほいと心憂きものは、人に憎まれんことこそあるべけれ。誰てふ物狂ひか、我人にさ思はれんとは思はん。されど、自然に宮仕どころにも、親・はらからの中にも、思はるる思はれぬがあるぞいとわびしきや——中略——親にも、君にも、すべて、うち語らふ人にも、人に思はれんばかりめでたきことはあらじ。

(岩波日本古典文学大系『枕草子』二二六七段)

人から愛されぬわびしさ、逆に愛されることの喜びを書きつづった一文であるが、ここに書かれていることは万葉の時代も変わらないことだろう。ましてほかの誰よりも愛されるということは、最上の喜びであったに違

いない。愛するものから愛される。これに勝る幸せはないだろう。この一文を見る時、坂上郎女の悲しい半生を思い起こさずにはおれない。

そんな郎女が、二人の娘だけは幸せにしたいと願ったであろうことは容易に想像できる。それだけに娘の結婚には期待と配慮があったと思われる。

郎女の長女である大嬢は、後に大伴家持のもとに嫁してゆくのであるが、郎女は家持に対して恋歌とともれる歌を数多く贈っている。これらは娘大嬢の代弁ではないかとも思われるが、それほどに家持の心を娘に近づきとめておきたかったのではないだろうか。

ところがそんな期待も空しく、家持と大嬢とは、結ばれた後、一度離別することになってしまった。そのことが巻四の七二七番の歌の題詞に記されている。

離絶数年、また逢ひて相聞往来す。

この「離絶」の原因には、一人の女性がからんでいるように思われるが、それについては後で述べることとし、まず家持と大嬢との出会いから確かめておくことにする。

家持と大嬢との結婚は、大嬢が十三歳を過ぎていなければ実現しない。先の推定によると、大嬢は養老六、七年頃に生まれているので、結婚できるのは天平六、七年頃となる。それより先、歌の配列によって天平五年以前の作と思われる家持の歌に次のものがある。

大伴宿禰家持、坂上家の大嬢に贈る歌一首

我がやどに蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむなそへつつ見む (八・一四四八)

これは大嬢をなでしこに喩え、美しく成長することを待ち遠しく思っていることを歌ったものである。つまり早く結婚できる年齢になることを願っているといえるだろう。したがってこの歌を詠んだ時より少し後、やは

り天平六、七年頃に二人は結婚したものと思われる。

ところがその後、天平十一年（七三九）夏に、家持は大嬢とは別の一人の女性に先立たれた悲しみを、長歌一首、短歌十一首に歌いあげることをしている。その時には家持の弟書持までが、兄を慰めるように歌を詠んでいるので、この時の家持の悲しみがいかに深いものであったかがわかる。

十一年己卯の夏六月、大伴宿禰家持、亡^ずぎにし^{をみなめかなし}妾を悲傷びて作る歌一首

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにかひとり長き夜を寝む

（三・四六二）

弟大伴宿禰書持即ち和ふる歌一首

長き夜をひとりや寝むと君が言へば過ぎにしひとの思ほゆらくに

（三・四六三）

この後四七四番まで家持の悲しみの歌が続くのである。一々をあげることはないが、それらの歌によって、亡くした女性を家持がどんなに大切にし、愛してきたかがわかる。

ところで四六七番の歌に「みどり子を置きて」とあることによって、家持とこの女性との間には子供まであり、女性が亡くなった時二、三歳になっていたことが知られる。つまり家持とこの女性との関係は、遅くても天平八年頃には始まっていたということである。

大嬢が家持に嫁したのが天平六、七年頃であり、家持と妾との関係の始まったのが天平八年頃だとすると、大嬢が家持のもとを離れていったのも、この女性とのことが原因であって、それは天平八年頃のことであったと考えられる。

その頃の作であることが左注によって知られる家持の歌に、次のものがある。

大伴家持の秋の歌四首

ひさかたの雨間も置かず雲隠り鳴きそ行くなる早^わ稲^{さだ}田雁がね

（八・一五六六）

雲隠り鳴くなる雁の行きて居む秋田の穂立繁くし思はゆ

(八・一五六七)

雨隠り心いぶせみ出で見れば春日の山は色付きにけり

(八・一五六八)

雨はれて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなびき

(八・一五六九)

これは考えすぎかもしれないが、この頃に家持が大嬢と妾との二人と関係していたとするならば、坂上郎女の怒りもかつていたであろうし、また家持自身二人のはざままで悩むこともあったのではないだろうか。これらの歌に見られる家持の弱々しさは、そんなところに起因するように感じられる。

ともあれ、こういったことがあったとすると、坂上郎女にとってそれは実に悲しい出来事であったに違いない。娘にだけは幸せな結婚をさせたいと願っていた郎女にとって、これこそ最大の衝撃であったのではないだろうか。

深い悲しみとともに、娘を思うやるせなさ、坂上郎女に次の歌を詠ませたのではないだろうか。

大伴坂上郎女、跡見の庄より、宅に留まれる女子大嬢に賜ふ歌一首 并せて短歌

常世にと 我が行かなくに 小金門に もの悲しらに 思へりし 我が子の刀自を ぬばたまの 夜昼

といはず 思ふにし 我が身は瘦せぬ 嘆くにし 袖さへ濡れぬ かくばかり もとなし恋ひば 故郷

に この月ごろも ありかつましじ

反歌

朝髪の思ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれそ夢に見えける

(四・七二四)

郎女が跡見の庄にいた時期は定かではないが、これらの歌が、先にあげた「離絶数年」の題詞をもつ歌(四・七二七)の少し前に配列されているところを見ると、大嬢が家持と別れていた頃のものと考えることができ。したがってこの歌で「もの悲しらに思へりし我が子の刀自」と詠まれた娘大嬢の悲しみとは、夫家持の愛

情がよそに向いたことによるものであり、そんな悲しみに沈んでいる娘に対して、人一倍の哀れさを感じた郎女の心が「この月ごろもありかつましじ」（そう長い間も生きておれそうにない）となって現れていると読むことができよう。

五

ところで、坂上郎女が同じ跡見の庄にいた時に詠んだ歌が、もう一群だけ残されている。

大伴坂上郎女、跡見の田庄にして作る歌二首

妹が目を跡見の崎の秋萩はこの月ごろは散りこすなゆめ

（八・一五六〇）

吉隠の猪養の山に伏す鹿の妻呼ぶ声を聞くがともしさ

（八・一五六一）

第一首では秋萩が歌われ、「この月ごろは散りこすなゆめ」と詠まれている。「この月ごろ」は、先にあげた七二三番の歌にも出ている。七二三番の歌で「この月ごろ」も生きておれそうにないと歌った郎女が、この歌では、秋萩に「この月ごろ」は散ってくれるなと詠んでいる。まるで秋萩が散ると、自分の命までも散ってなくなってしまうかのように歌っている。この時坂上郎女は、秋萩に自分を重ねていたのではなかっただろうか。

郎女は、たまたま目の前に咲いている萩を見ながらこの歌を詠んだのかもしれない。しかし、私はこの歌を詠んだ時の郎女の心の中に、穂積皇子の詠んだ歌があったのではないかと考えている。その歌は、前にもあげた巻八の一五四番の歌、

秋萩は咲きぬべからし我がやどの浅茅が花の散りぬる見れば

である。この歌で穂積皇子が「浅茅が花」に但馬皇女を、「秋萩」に坂上郎女を喩えたのではなかったかと述べた。この歌は十分にそう読み取れる歌である。この歌に郎女が接した時、自分は秋萩なのだと思つたとしても不思議はない。この歌によって郎女は自分を秋萩だと思ひ続けることになつたのではないだろうか。そう思うと、先の「妹が目を」の歌も、よく理解できる。悲しみに暮れる娘に早く会って慰めてやりたいという思いと、自分自身のつらさに身も滅びそうなところから何とか抜け出したいという思いが読み取れるのである。

ただここで郎女はどうして穂積皇子の歌を思ひ出したのか、ということが問題となろう。その疑問は今の歌に続いて詠まれた「吉隠の」の歌が解いてくれそうである。

坂上郎女は跡見の庄にいた。そこは奈良県桜井市東方の初瀬周辺の地かといわれている。一方吉隠は、初瀬からさらに東数キロメートルのところにある。地形的に見て、跡見から吉隠は見ることができない。ましてそこにいる鹿の声など聞こえるはずもない。それなのに郎女は跡見にあって吉隠の鹿の声をうらやましいものとして聞いているのである。実際には見えていないものを見、聞こえていない声を聞いているということは、これは郎女の心が見、また聞いていたということだろう。郎女は、なぜ見えないものに思ひを馳せていたのだろうか。

集中「吉隠の猪養」の詠み込まれた歌は、実は二首しかない。それが郎女の今の歌と、穂積皇子が亡き但馬皇女を思つて詠んだ歌とである。郎女が吉隠の猪養を歌う時、そこに穂積皇子の歌が心の中にあつたことは、十分に考えられる。

郎女はこの時、娘が家持から愛されなくなったという憂き目にあい、自分だけでなく娘までもが、という悲しみにさいなまれていたことだろう。そんな時、結局は結婚できなかったとしても、真実愛し愛され続けた穂積と但馬の二人の仲を、心からうらやましいものだと思つたのではないだろうか。「吉隠の猪養の山でじつと

している鹿が、妻を慕って鳴いている。そんな声を聞くのは何ともうらやましいことだ」と歌ったのである。坂上郎女は、その恋愛と結婚を通じて、結局誰からもただ一人の女として愛されることなく過ごすことになった。そして大切に育てた娘までもが、自分と同じような状況に陥るといふ、母親として耐え難い苦痛にもあうことになった。そんなつらさをどこにももって行くことができず、郎女はただ歌うことで心を晴らしていたのではないだろうか。もう一首萩を歌った彼女の次の歌からは、そんな郎女のやるせない心情が伝わってくる。

大伴坂上郎女の晩の萩の歌一首

咲く花もをそろは厭いとはしおくてなる長き心になほ及しかずけり

(八・一五四八)

咲く花も「をそろ」(早咲きのもの)はいやなものだ。ゆっくりと遅くに咲く花のように、いつまでも長く愛されるものにはやはり及ばない。こんなふうに歌うのも、自分を萩に、それも浅茅の花が散る頃に咲きだす早咲きの萩に喻えた穂積皇子のもとに嫁いだのが早過ぎたことを思い、結局誰からも愛し続けられることのなかった身の不幸をかみしめていたからではないだろうか。

(本研究は、一九九二年度神戸女学院大学女性学インスティテュート研究助成によって行ったものである。)

Summary

Sakanoueno Iratsume's Sorrow as a Woman and a Mother

Toru Kitajima

Sakanoueno Iratsume is one of the leading female poets in the days of *Man-yō Shū*. In this paper, I explored the causes of Iratsume's sorrow as a woman and a mother expressed in her poems.

Iratsume's prime concern was her daughter's happiness as a wife. However, her daughter's marriage didn't last long, and Iratsume was very distressed by this. In bitterness she remembered her own first husband, Hozumino Miko. He could never overcome the grief at the untimely death of Tajimano Himemiko whom he had been deeply in love with. Even after he was married to Iratsume, he was still living with the memory of Tajimano Himemiko. Iratsume suffered from envy, but at the same time, she yearned for such an everlasting mutual love as theirs.

In those days, polygamy was so common that women in general made no question of the system. Iratsume, however, was convinced that the true love she was yearning for could be found only in monogamy. Looking for true love, she married twice and had a love affair in vain. She was a lonely woman whose wish was neither fulfilled nor understood.